

氏名(本籍)	あ べ いく お 阿 部 生 雄 (東 京 都)		
学位の種類	博 士 (教 育 学)		
学位記番号	博 乙 第 1748 号		
学位授与年月日	平成13年6月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	教育学研究科		
学位論文題目	筋肉的キリスト教の思想と近代スポーツマンシップ トーマス・ヒューズを中心に		
主査	筑波大学教授	博士(教育学)	山内 芳文
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	宮寺 晃夫
副査	筑波大学助教授	教育学博士	窪田 眞二
副査	筑波大学教授	博士(体育科学)	高橋 健夫
副査	筑波大学教授		佐伯 聰夫

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、肉体、男らしさなど、スポーツの道徳的な再評価を伴って19世紀中葉に現れた「筋肉的キリスト教」(muscular Christianity)の思想と19世紀中葉以後に倫理的な性格を帯びるようになった「スポーツマンシップ」との関係、トーマス・ヒューズ(Thomas Hughes, 1822 - 1896)の代表的な三つの小説、『トム・ブラウンの学校生活』(*Tom Brown's Schooldays*, 1857)、『オックスフォードのトム・ブラウン』(*Tom Brown at Oxford*, 1859 - 61)と『白馬の浄祭』(*The Scouring of the White Horse*, 1858)を手がかりとして考察することを通して、最終的には、現代のスポーツマンを呪縛することになっている「スポーツマンシップ」の倫理化傾向が「筋肉的キリスト教」と密接に関係していたことを明らかにすることをねらいとしている。

第1章は、筋肉的キリスト教の時代。ここでは、筋肉的キリスト教の思想背景を明らかにするため、「スポーツマンシップ」用語の変遷をてがかりに、近代スポーツの動向、パブリックスクールにおけるアスレティズムの動向に照準が当てられた。その動向は、19世紀におけるグレート・パブリックスクールの成立、それらにおけるゲームの組織化動向、さらにはアスレティズムの興隆の特色として実証的に明らかにされた。また、クラレンドン委員会報告書(1864)の証言から、ゲーム活動の組織的な基盤がプリーフェクト制度にあり、その正当化の理由がリーダーシップと男性的な資質の陶冶にあったことも明らかにされた。第2章は、筋肉的キリスト教の誕生。ここでは、筋肉的キリスト教という用語の成立をもたらしたいくつかの批評が分析され、その特色が明らかにされた。筋肉的キリスト教という用語は、これらの批評では、キングズリとヒューズの小説に見られるパブリックスクールの礼賛、競技主義の礼賛、身体的力による問題解決、反知性主義を批判するものとして誕生したことが明らかにされた。第3章は、トーマス・ヒューズの生い立ちと思想形成。ここでは、ヒューズの生い立ちと思想形成が、主として、幼少期からキリスト教社会主義の運動に挺身し、上述の三つの小説を書く時期まで、さらにその補足として、それ以後のヒューズの活動に分けて考察された。ことに、ヒューズがラグビー校のアーノルド(T. Arnold)の「クリスチャン・マンリネス」、カーライル(T. Carlyle)の社会的正義に基づく功利主義批判と理想主義的反動の思想の影響を強く受け、またモウリス(F. D. Maurice)の「キリスト教王国」や「キリスト教社会主義」の影響を受けたことが明らかにされ、ついで、こうしたモチーフが筋肉的キリスト教の思想形成と深く関係していたことが指摘された。第4章「トム・ブラウンの学校生活」とスポーツマンシップ。ここでは、『トム・

ブラウンの学校生活』からヒューズの筋肉的キリスト教とスポーツマンシップとの関連が明らかにされた。そのさい、この小説のねらいがアーノルドの宗教思想と教育思想の特色をなす道徳的な発達段階論に則して「クリスチャン・マンリネス」の資質獲得の過程として説明されることで、スポーツは大人 (manliness) の資質を与え、社会的道徳資質や倫理規範と結びつく徳行の場となったことが明らかにされた。第5章は、『オックスフォードのトム・ブラウン』とスポーツマンシップ。ここでは、その著作は、スポーツマンで筋肉的キリスト教徒である者に社会正義の実現に対する義務を自覚させ、支配階級と服従階級の融和をはかり、紳士としての「レスペクタビリティ」を保持し、貧しい人々のために社会の矛盾と闘う改良家とならねばならないという主題を維持しているものとして位置づけられ、さらにトムの交友関係を通して「人間の肉体は鍛えられて服従に伏す」ことが伝統的スポーツマンと筋肉的キリスト教徒との決定的相違として示される。それにもとづいて、ヒューズの「筋肉的キリスト教徒」には、明確にスポーツマンとレスペクタビリティ、倫理、徳行との結合があることが明らかにされる。第6章は、『白馬の浄祭』。この著作は、田園共同体の有機的秩序と融和、健康なレクリエーション、体力、闘争心、勇気、忍耐の涵養、郷土愛や愛国心をもたらし民衆祭と民衆スポーツの機能に注目したものとして特徴づけられる。それが大衆基盤をもった倫理的資質を不可欠のものとする近代スポーツマンシップの思想発生の契機であったとみると、一般大衆に向けられたこの小説の説教的な含意は、他のふたつの小説と総合して考察することにより、神なきスポーツ、神なきアスレティズムに神を送り込もうとすることにあつたと判断できると推論している。第7章は、筋肉的キリスト教イデオロギーの思想展開とトーマス・ヒューズ。ここではヒューズの筋肉的キリスト教がその後どのように変質したのかが、彼の宗教観、新興パブリックスクールにおけるスポーツマンシップの浸透、文学作品に登場する筋肉的キリスト教徒像の変質、筋肉的キリスト教の世俗化と帝国主義理念との結合という点から考察される。そこでは、筋肉的キリスト教の世俗化されたゲーム倫理がソーシャル・ダーウィニズムの处世術に、また様々な帝国主義的若者組織の好戦的理念のうちに吸収され、また筋肉的キリスト教のゲーム倫理がその世俗性ゆえに異文化、異宗教の存在する世界でスポーツマンシップとなり得たことが明らかにされ、その過程は筋肉的キリスト教の消滅であると同時に近代スポーツマンシップ・イデオロギーの誕生であったと指摘されている。

結論としては、キリスト教に肉体を復権させ、「マンリネス」なる行動倫理を中世騎士道のアナロジーで再生させた筋肉的キリスト教の思想的な系譜、ことにヒューズにおいて明確なように、「善」(神)への服従奉仕であるスポーツが必然的に「善」となり、また徳行とならざるを得ないという論理転換によって、近代スポーツマンシップに理論的な根拠を提供したとされる。このような結論にもとづいた研究上の展望は、つぎのような見通しを得るにいたる。筋肉的キリスト教は、そののち、帝国主義のもとでのソーシャル・ダーウィニズムと不可知論の台頭の過程で「神」を喪失させ、スポーツは徳行であるという可能性だけを残存させ、さらには筋肉的キリスト教思想に影響を受けた近代オリンピックの創始者クーベルタンによってその徳行の可能性にスポーツマンシップの命運がかけられたという事実が示すように、近代スポーツマンシップは筋肉的キリスト教の遺産であり、筋肉的キリスト教はスポーツマンシップの源流に位置する思想であった、と。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

現代のスポーツマンを呪縛するようになっていくという「スポーツマンシップ」の倫理化の傾向が「筋肉的キリスト教」と密接に関係していたことを明らかにしようとする本論文の課題は、先行研究の確かな吟味によって設定されているが、その論証は、ヒューズの小説を主要なテキストとしながらも、スポーツ史関連の豊富な第一次資料や関連資料を渉猟し、十分に説得力のある構成をもち、さらにそれにそつた展開となっている。そして、本論文において得られた結論、すなわち、筋肉的キリスト教の思想的な系譜、ことにヒューズにおいて「善」(神)への服従奉仕であるスポーツが必然的に「善」となり、また徳行とならざるを得ないという論理転換によって、近

代スポーツマンシップの理論的な根拠を提供したとの推論は、その点で、十分に妥当性をもつものと判断される。ただ、文学作品を思想史研究の対象とするさいの方法的な処理に若干の不安がみられること、また第7章や結論部分においていささか強引に仮説に符節を合わせた推論の導出傾向がみられることなど、いくつかの問題点を含んではいるが、これらはいずれも先駆的で本格的な近代イギリス・スポーツマンシップ研究としての本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。